

## アレキシサイミア傾向者の感情と感覚・身体関連性

### 目的

アレキシサイミア傾向を持つ対象者と、持たない対象者において、MD法とBL-Sへの回答内容を比較検討することで、個人特性による感情と感覚・身体関連性の違いを明らかにする。

### 方法

対象とした感情は、基本6感情(しあわせ, 悲しい, 恐い, 怒り, 驚き, 嫌い)を使用した。MD法として10の感覚モダリティについて、各感情とどのくらい関連があるか7段階評定を行った。BL-Sでも7つの身体部位(額, 喉, 胸, 胃, 下腹部, 内臓, 全体)について、7段階評定を行った。同時に、実験参加者のアレキシサイミア傾向を把握するために、日本版TAS-20(三京房,2015)に回答を求めた。実験参加者は、大学生153名(男22名, 女123名, 未記入8名)(平均年齢18.8歳, SD=1.08)。

### 結果

「悲しい」について、アレキシサイミア傾向高群は、身体部位との関連度は、他の2群と比較して高いと評定した。(F(2, 150)=3.28  $p<0.5$ ) (図1)  
6感情ごとにMDプロフィール, BL-Sプロフィールに注目すると、アレキシサイミア傾向高群は、他群に比べ、感情と感覚・身体部位の関連度を高く評定する傾向が読み取れる。

群わけ	TAS-20得点
通常群(N=87)	59点未満
中群(N=39)	59点以上66点未満
高群(N=27)	66点以上

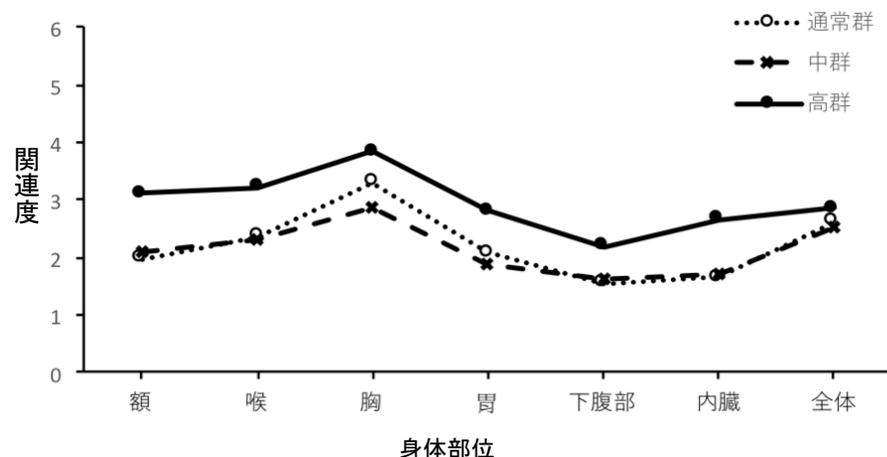


図1 「悲しい」について、アレキシサイミア傾向高群・中群・通常群別のBL-Sプロフィール